琉球大学学術リポジトリ

[書評] 岡本弘道(OKAMOTO Hiromichi)著『琉球王国海上交渉史研究』

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学国際沖縄研究所
	公開日: 2016-05-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 深澤, 秋人, Fukazawa, Akito
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/34028

［書　評］

岡本　弘道（OKAMOTO Hiromichi）著
『琉球王国海上交渉史研究』

榕樹書林（沖縄）　2010 年 3 月　264 頁

深　澤　秋　人（FUKAZAWA Akito）

1.　本書の構成

本書は、著者が 1996 年から 2009 年のあいだに発表・提出した論文に補訂を加え、一書にまとめたものである。「『古琉球』期の対外関係とそれに関連する事項を分析・考察し、琉球王国の形成と発展のありかたを考える上で必要な論点を指摘する」ことを課題とする（「まえがき」）。全体は七つの章から構成される。目次は以下の通りである。

まえがき
第一章　明朝における朝貢国琉球の位置づけとその変化――一四・一五世紀を中心に――
　一　明朝・琉球間関係の統計的推移　／二　明朝の対琉球優遇政策の展開　／三　琉球優遇政策の転換とその要因
第二章　明代初期における琉球の官生派遣について――『南雍志』にみる国子監留学生の位置づけとして――
　一　『南雍志』による琉球官生像の再検討　／二　第一期琉球官生派遣の意義　／附録　『南雍志』中の琉球官生関連記事
第三章　琉球王国の半印勘合と明朝の朝貢勘合との関係について
　一　問題設定　／二　『歴代宝案』に見る「半印勘合」　／三　明朝の往来使節管理制度としての朝貢勘合と琉球
第四章　古琉球期の琉球王国における「海船」をめぐる諸相
　一　「海船」の調達と管理――「字号船」から「土船」へ　／二　「海船」の運用の実態――琉球の半印勘合を手掛かりに　／三　「海船」組織と「ヒキ」=「陸の海船」
第五章　「新興通商拠点国家」琉球の形成と展開について――比較対象としてのハミ・マラッカを中心に――
　一　朝貢国としての成立と永楽帝の世界構想　／二　明朝の関与後退と「新興通商拠点国家」の展開
第六章　明朝朝貢体制から見た琉球の対明朝貢の実態
　一　琉球の朝貢ルートの概要　／二　琉球から見る、行為としての「朝貢」
第七章　古琉球期における琉球王国の交易品――域内社会との関連を中心に――
　一　交易形態と交易品の概要　／二　琉球王国の交易品と琉球弧
むすびにかえて
引用文献目録／索引

まず、各章の論点を紹介することにする。「まえがき」においては、本書の最も重要なキーワー

ドは「交渉」であるとする。その定義について、外交や政治・経済における利害調整のような、言語による明示的なネゴシエーションとともに、文化接触とそれに伴う反応、認識や価値観の衝突・刷新・継承、同一人格内における矛盾・齟齬の克服といった非言語的・非明示的な相互作用も「交渉」と呼びうる営みであろうと述べる。そのうえで、「琉球王国」の出現・生成過程自体が「交渉」そのものであり、それを離れては議論しようのない存在であるとしている。

第一章では、明代前期における琉球の朝貢と明朝の対琉球姿勢の変化との関係について分析・考察した。琉球の明朝に対する朝貢の最盛期は、1383 年以降 1450 年代以前の限定された期間であることを指摘したうえで、この時期、明朝は、「朝貢不時」、大型の海船や中国人の「下賜」、比較的自由な貢道の選択など琉球優遇政策を採用していたと述べた。これは、1380 年代に対倭寇政策の基軸であった対日本関係の閉塞に起因し、それまで強力な王権が存在せず、中国との外交関係も存在しなかった東シナ海世界に、明朝は新たな海上交易勢力を育成し、倭寇のような秩序の外側に置かれた海商を含めた一種の「受け皿」とする意図があったと論じた。しかし、倭寇の活動がまばらになり、明朝にとって大きな脅威でなくなった時、琉球への優遇政策は次第に後退し、琉球の朝貢貿易活動も制約を受けることとなったとした。

第二章では、明代初期の琉球官生派遣について、南京国子監の祭酒によって編纂された『南雍志』を用い、その歴史的特徴を指摘した。洪武 25 年（1392）から宣徳元年（1426）までのあいだ南京国子監に琉球官生が常駐していたこと、長期にわたって国子監に滞在した琉球官生を多数確認できること、国子監の官生でありながら進貢使節の正使格をつとめる人物を見いだせることである。そのうえで、琉球側にとっての官生派遣は、朝貢業務を補完する役割に第一義的意義を見いだしうると述べた。

第三章では、『歴代宝案』に収録された符文・執照に見られる琉球の「半印勘合」の性格、琉球王国の使船派遣制度（半印勘合制度）の創設とその意義について考察した。その性格については、明朝が朝貢国に発給した「朝貢勘合」とは別個のものであり、琉球側によって設定された独自の制度であることを明らかにした。また、琉球の半印勘合は、琉球国王から派遣使節の代表者に発給される形式であることから、その照合がなされたのは使節が帰着した時点であろうとし、琉球王国の支配体制・官制が未成熟であった 15 世紀中葉以前においては、所定の業務を遂行して帰着したか否かを確認する手段として実用的に運用されていたと想定した。

第四章では、琉球王国の対外関係を実態面で支えた大型の「海船」を検討対象とし、「海船」の調達と管理、運用の実態、その組織編成の琉球社会への影響について論じた。背景には、琉球王国の海上交易活動を明らかにし、その活動を媒介として様々なレベルで展開された文化交渉の実像に迫るためには、「海船」の問題を丹念に整理する作業が不可欠との問題意識がある。16 世紀後半以降と考えられる「国産化」にいたるまでは、福建を中心とする中国沿岸で造られた船が琉球海船として運用されていた。当初、琉球「海船」は、明朝の沿海衛所に配備された軍船から支給されていたが、そうした「下賜」期から福建等における自弁建造期（14 世紀後半～16 世紀前半）においては、琉球の海船は各衛所において編成された字号により管理されていたことを明らかにした。また、「下賜」期においては、明代の中国軍船の制度を踏まえた議論の必要性を指摘した。

第五章では、琉球王国の国家形成及び展開（領域統合）をアジア規模の歴史的変動のなかで考察するため、比較対象として、内陸アジアのハミ、東南アジアのマラッカ王国の事例を概観した。三者には、明朝成立後に登場した新興国家であること、交易上の要衝に位置し、交易ルートの結節点として重要な役割を担ったこと、明朝の強力なバックアップを得て急速に発展したこと、明朝に頻繁に朝貢使節を派遣し、明朝の朝貢秩序のなかで重要な役割を果たしていたことなどの共通

点があると述べ、「新興通商拠点国家」と位置づけた。明朝の関与が後退する15世紀中葉以降、それぞれを取り囲む周辺諸勢力の動向によって行く末は異なったが、これらを比較検討することの有効性を指摘した。

第六章では、明朝の朝貢体制の歴史的性格を再検討する近年の研究動向を踏まえ、琉球の「入貢地」(「貢道」の入口)と朝貢ルートを再確認し、明朝に頻繁に朝貢を行っていた琉球が「朝貢体制」のなかでどのような役割を果たしたのかを分析し、行為としての朝貢とその積み重ねとしての朝貢関係が現実の地域交流システムにどのように作用したのかを考察した。明代前半の琉球は、「貢道」を介し各入貢地を起点とした交流ネットワークが体制への適応によって形成されるなか、複数の入貢地をある程度自由に〝選択〟し、使い分けていたという意味で特異な存在であると述べた。その過程で、琉球海船の供給と往来、琉球と中国との人的往来の問題を考える際、浙江という地域の持つ重要性をより意識する必要があるとしているのは非常に示唆的といえよう。また、頻繁に朝貢使節を派遣していた14世紀末から15世紀前半においては、琉球にとって「朝貢システム」は相対的な存在であり、有効性如何で取捨選択しうるものであったが、16世紀後半になると自らの存在意義を保障する不可欠な要素として、「朝貢システム」のなかに自らを積極的に位置づけるようになったと論じた。

第七章では、琉球の交易品(輸出品)のなかの域内産の品目が、15世紀中頃、自然採取品といえるヤコウガイや磨刀石から、土夏布・芭蕉布・紅花などの加工品へと変化したことに着目し、域内社会(各島嶼社会)にとっての意味を論じた。島嶼社会は、域外交易や琉球王国の交易と関係することによって、鉄器や貿易陶磁を入手するとともに、社会秩序を形成・維持していたとする。17世紀初頭、島々から貢納された産物が重複していないことから(米を除く)、琉球弧レベルでの分業体制が成立していたことを指摘したうえで、品目の変化は、各島嶼社会が、交易構造の変動に適応したものであることを示唆した。さらには、この問題とリンクさせ、交易品の品目が変化した15世紀中頃以降に行われた琉球王国の版図拡大の歴史的意味を捉え直そうともしており、非常に刺激的な問題提起である。

「むすびにかえて」では各章の要旨をまとめている。そのうえで、海上交易の面で衰退し、薩摩の侵入・支配を受ける17世紀初頭の段階で、すでに一定の支配体制の確立・領域統合を完了しえた要因を考える時、やはり14世紀後半から16世紀にわたる時期およびこの間の「交渉」の持つ重要性、影響力は決定的であったと結論づけた。

2. 本書の成果と若干の問題点

本書の成果や特徴は大きくは二つあるように思う。一つは、14世紀後半から16世紀におけるアジア規模の歴史的変動のなかに、明朝への朝貢国としての琉球王国、新たな海上交易勢力および「新興通商拠点国家」としての琉球王国の形成と発展を有機的に位置づけたことである。琉球と明朝の二国間関係史、一国史としての琉球王国の歴史を相対化する視点を提示したといえよう。

そしてもう一つは、琉球王国の交易品の変化を通し、琉球弧の島嶼社会に軸足を置き、島嶼社会と琉球王国との関係を論じようとしたことである。琉球王国の発展に関わる重要な問題提起と受けとめた。

評者が気になった疑問点や問題点も取り上げたい。まず、章ごとに気づいたことを指摘する。

「まえがき」では、琉球王国の漢文外交文書集である『歴代宝案』が利用可能となった1930年代以降の研究動向、国際的な学術交流が活発化するなどした1980年代以降の研究環境の整備の歴史が整理されている。そこでは、前者に関連して、1994年度から97年度にわたって進められた文

部省科学研究費重点領域研究「沖縄の歴史情報研究」での研究史の分類に批判的検討が加えられている。その批判自体には首肯すべき点が多いが、2000 年代において研究動向を整理した成果も踏まえたうえで、著者による研究史の整理に接したかった。また、先行研究の論点や問題点をまとめたうえで本書の課題が設定されていないことに違和感を覚えた。

第六章の「はじめに」では、「貢道」を朝貢国や朝貢勢力が入貢する入境ルート（204 頁）、「貢道」の入口として「入貢地」、そして朝貢ルートを区分して説明するが（205 頁）、本文では「貢道」と「入貢地」の関係がやや不分明である印象を持った。また、「入貢地」から南京もしくは北京までの進京ルート（入国後の陸路、213 頁）が朝貢ルートに当たると読み取ったが、索引の語彙では「貢道（朝貢ルート）」としている。これでは読者の混乱や誤解を招く恐れがあるのではないだろうか。

関連して、明代の琉球使節の「入貢地」（あるいは「貢道」）として、泉州、福州、瑞安・温州、寧波、広州をあげ、機能について論じているが、具体的なイメージを喚起させるため、それぞれの港町の景観上の特徴、その共通点や相違点についても触れてほしかった。

第七章の論点は前述した通りであるが、いくつか疑問を呈しておきたい。まず、各島嶼社会は交易構造の変動に等しく適応し、加工品を生産するようになったのだろうか。そこに適応をめぐる差異は存在しなかったのだろうか。それぞれの地域社会のありかたや島をめぐる環境が異なることはなかったのだろうか。そして、そもそも各島嶼社会と表現した島々はどの島を指しているのだろうか。本書のキーワードは「交渉」である。重要な問題提起であるだけに、島嶼社会と琉球王国の「交渉」のモデルを示してほしかった。

なお、近世琉球の首里王府は、多くは日本市場に輸出された特産物の生産を地域ごとに割り当てており、研究成果も蓄積されている。島嶼社会の適応の問題は近世に連続する、近世からさかのぼると考える。できれば、近世琉球の状況も視野に入れた議論に接したかった。

最後に本書全体に関わる問題点について指摘したい。第一章の「はじめに」で、戦後の琉球対外交渉史研究は、大筋では、公開された『歴代宝案』に依拠した昭和 10 年代の実証研究を土台に築かれたと述べている（15 頁）。戦後の「琉球対外交渉史研究」として括った先行研究は示されていないが、本書のタイトルは『琉球王国海上交渉史研究』である。「まえがき」をめぐって指摘した問題点とも関連するが、これまでの「琉球対外交渉史研究」との違いやタイトルの意図がどこにあるのかを読者に明確に説明する必要があったのではないだろうか。少なくとも評者は、タイトル、課題、成果の関係を統一的に読み取るのに多少の時間を要した。

第六章の「はじめに」では、「朝貢」に関する議論を、個別の朝貢事例、二国間の朝貢関係、朝貢に関係する当事者にとっての「朝貢体制」、世界構造としての「朝貢システム」の四つに分類している（205 頁）。極めて的確だと思うが、「まえがき」や「むすびにかえて」で、各章の成果や本書全体の意義をこの分類と関連させて位置づけてほしかった。

以上、著者の意図を正確に読みとって読者に伝えられているか危惧するところであるが、ひとまず擱筆することとしたい。なお、本書は 2010 年度の第 38 回伊波普猷賞を受賞している。

（沖縄大学）